

5 7 5 7 7 発  
想 羽凍 哉

羽凍 哉(はとう かな)

おうじゅ

央樹の街にも、桜の季節がやって来た。

寒さに耐えて見事な花を咲かせる桜を見ていると、ひとつのことを思い出す。

ある日、ぼくが仕事から家に戻ると妻は急に「目を瞑って」と、言いだした。

妻の言うとおりに目を瞑ると、ぼくの手のひらに何かをのせる。

そして、話します。

「今日はね、風が強い日だったのよ。それで、坂の上の小学校から飛来したの。

玄関を掃除していたら舞い降りて来て」。

ふたりで散歩の途中、小学校の入り口に桜の木を見つけたのを思い出して言った。

「桜の花びらだね」「そう、目を開けて」。

その年の秋、事故で妻が逝ってしまった。

全てを忘れる為、北都に越してきたはずだった。

けれど、桜が咲くと妻との桜のやりとりだけは、心の中に息を吹き返す。

妻がそうしてくれたように桜の花びらを手のひらにのせて、目を瞑る。

それだけのことをまるで、儀式みたいに人知れず行う春の午後が幾度も過ぎた。

さくら、さくらと唄っては。

FIN.

央樹芸術院。

将来を嘱望された、若き芸術家たちが北都の内外から集う。

建物の真ん中のコートでは、楽器の練習をする器楽科の生徒たち。

舞踏科との合同発表では、「ジゼル」を皆に披露する。

舞踏科の練習場は、コートの南側の建物。

皆が、個々に集まり練習の真っ最中。

プリマドンナの桃李さん。幾人もの女の子が、彼女を目指して央樹芸術院にやって来る。

そして、器楽科の者の中には、彼女に恋をしてしまう者も。

オーケストラピットで奏でる曲が、そのまま愛しい人と一緒にクルクルと舞う。

それだけで、我が世の春。

彼女の一舞で央樹芸術院全体が、春になっていくのだった。

春はこうして、央樹の街の真ん中を色づけ始める。

弟は身体が弱く、学校も休みがちだった。

「兄様。桜が咲きましたね」

窓辺に寄せた寝台から、中庭の桜を見ていた。

「ああ」

素っ気ない返事をする。

弟が病気で伏せっているというのに、桜の花は満開だ。

心の底から、許せない気持ちがわいてくる。

「兄様。お願いします。ぼくが死んだら、中庭の桜の木の根元に

ぼくの骨を埋めて下さい。一欠片で構いません」

わたしは、無言でいた。

弟の願いを聞き届けることは、出来ないと思った。

桜が弟の命を吸い取っている。

そんな気持ちにさえ、なった。

弟は、まもなく息を引き取った。

父は、弟が望んでいたことだから、骨の一欠片を桜の根元に

埋めてやろうと言った。

それから、幾星霜が過ぎたのだろう。

わたしも、初老を迎えていた。

ある日、孫が中庭で何か拾ったと、わたしのところへ持って来た。

桜の木の根元で拾ったと言う。

わたしは、その形に見覚えがあった。

その時、記憶は一瞬にして遠い日に戻った。

(これは、あの時の骨)

心の中で思い出すのは、まだ元気だった弟とトンボをとったこと。

そして、中庭の桜の木は満開だった。

(桜の木よ。許せないなどと、思って悪かった。許してくれ)

わたしは、桜の木に話しかけた。

今日は、妻と出かけてきた。

妻とぼくの共通した友人の結婚式へ。

その帰り道、妻はお腹が空いたと言い出す。

「じゃあ、どこかで食べて帰ろうか」

ぼくが尋ねると、妻は笑って言った。

「賛成」

普段の妻は、病弱で外へ出るのを疎ましがる。

しかし、今日の妻は学生のころの華やかさを取り戻していた。

こげ茶色のドレスは、ぼくが見立てて贈った物。

化粧品は、少し濃い目の桃色の口紅にうっすらとした、ファンデーションとチーク。

思わず見とれてしまった。

「ねえ、吏(つかさ)さん。どこ見てるの」

「エリコの顔だよ」

「嫌だ。そんなに見つめないで」

そう言って、笑う妻。

友人の結婚式の帰り道で、いつも妻と自分も幸せでいると、改めて神に誓う。

だから、病弱な妻の笑顔は妻からの最高の贈り物だと、思う。

「ずっと、笑顔で居ておくれ」

妻に伝えると、妻の腕がぼくの腕にからまった。

ぼくと妻は全て手作りしている、ハンバーガーの店に入った。

ハンバーガーが食べたいと言ったのは、妻だった。

いつもは、ファストフードは身体に悪いからと、口にしないのに。

それだけ、妻の健やかさが戻ってきたのかもしれないと思った。

ハンバーガーが運ばれてくると、いただきますと手を合わせて食べ始める。

「こうして、ハンバーガーを食べるなんて、何年ぶりかしら」

妻は、言う。

「何年、ぶりだろう。」

答えて、また妻を見つめる。

(エリコ、愛しているよ)

店を出てから、ぼくは妻にひとつの提案をした。

「ねえ、エリコ。写真を撮ってあげるよ」

妻は頷き、言う。

「綺麗に撮ってね」

灯りの下に立った妻に携帯をむけると、満面の笑みで少し斜に構えた。

「はい。いくよ。ポーズ」

妻は、健やかな面影をぼくの携帯に残した。

翌朝、ぼくは携帯の待ち受けを笑顔の妻に変えた。

(ねえ、エリコ。ぼくはこれからも、きみと生まれ来るであろうぼく達の子のために、大切なことを守って生きていくよ。これから先も、元気でいておくれ。この先も、ずっと愛しぬくことを誓うよ)

待ち受けになった妻の笑顔に、そう誓った。

FIN

春の陽射しは徐々に暖かさを増す。

太陽は曇りひとつ無く輝き、ブルーベルのご婦人は優雅な青いドレスを翻しながら、あの声に合わせて踊る日を楽しみにしている。

あの声とは、東樹英学舎の裏庭で毎日、1人で練習を重ねる合唱団のソリストの声のこと。

ブルーベルのご婦人たちは裏庭に建つ東屋を取り囲むように咲き、代々のソリストの歌声を聴くための特等席に鎮座している。

5月、上旬。

雪は消え、ブルーベルのご婦人たちの期待は最高潮に達する。

そこへ、1人の青年がやって来た。

ご婦人たちは、今年の5月に通って来た津和路きりあでないことに早々に気がついた。

「まあ、誰かしら？」

「きりあさんは、卒業なさってしまったのね」

「新しい、お坊ちゃまに期待致しましょう」

そんなざわめきを最後に辺りは、しんと静まり返った。

すると、青年はひとりごとのように言う。

「おはようございます。第30代ソリストの葛原白亜です。よろしく、お願い致します」

その声は、まるで女性のそれだった。

ブルーベルのご婦人たちはざわざわと、色めき立った。

それは、その青年の声が高く美空に上り、天で鳴く鳥たちの声と合唱を始めたから。

それは、今までのソリストとは明らかに違い、高音域が澄んだ音をしていた。

「素敵な声のお坊ちゃまね。何はともあれ、礼儀正しいわ」

「そうね」

ブルーベルのご婦人がそんな会話をしながらざわざわしていると、青年はブルーベルのご婦人に向かって話しかけた。

「ぼくの声を聴いてくれて、ありがとうございます」

そんな青年にブルーベルのご婦人は、青いドレスを翻して返事をする。

風が心地良く吹いて、ドレスが翻る。

それに合わせて、青年は微笑えむ。

そして、次に歌を唄ってみせる。

今までに、ソリストを受け持ったどの青年よりも高い声。

ブルーベルのご婦人たちは、青年をこう呼んだ。

「天使？」

「そうね。天使よ」

「天使だわ」

かくして、ブルーベルのご婦人たちは、第30代ソリスト葛原白亜を天使と呼んでざわめくのだった。

それは一春中続いた。

FIN.



「未来(みき)。今日、このカレンダーを贈るよ。クリスマスまでに、この小窓を数字の順番に1つ1つ開いてごらん」

父様はそう言って、わたしに小窓の付いたカレンダーを手渡して下さった。

それは、アドヴェントカレンダーといって、12月25日。

つまり、クリスマスデーまでのカレンダーになっているのだった。

1日1回開くための小窓が25個ついている。

それを12月1日より開いていき、最後の小窓は12月25日のクリスマスデーに開く。

それが、アドヴェントカレンダー。

父様も、わたしも、キリスト教の信者ではない。

けれど、年の瀬のせわしなさの中に互いを思いやる、小さな幸せを感じる行いが12月1日のアドヴェントカレンダーの交換になっている。

父様、有難う。

そして、12月は感謝と共に忙しく過ぎていく。

FIN.

幼いころ。わたしは家に籠りがちな子だった。  
内気が高じて、外へ出るのが怖かったのだ。  
そんなわたしにも、家の中には沢山好きな場所があった。  
一番好きだったのは、父の書斎。  
父は、こっそり入り込んで遊んでいる、わたしを見つけては話しをしてくれた。  
「太陽に顔を向けて目を瞑ると、目の前が赤くなるのを知ってるかい」  
わたしは、首を横にふる。  
「今度、天気の良い日にやってみるといいよ」  
父は、様々なことをわたしに話してくれた。  
その後わたしは、齢を重ね結婚をして家を出た。  
ある時、実家を訪れ父の書斎に入り込み、用事を済ませようとした。  
そこには、わたしの幼いころにそっくりな人形が、立っていた。  
赤いエナメルの靴を履いて。  
わたしは涙が溢れるのを抑えて、無言で父をその場に連れてきた。  
父とわたしは、黙ったまま過去の会話を思い出していた。  
そして、書斎を出て、庭先で太陽に向かって目を瞑ってみた。  
確かに、目の前の帳は赤かった。

FIN.

青年の背中には、右肩から左脇腹へと、斜めに一本の青薔薇の刺青が施されていた。

もう、後戻りはしない。

そんな決意を彼は背中に刺青として残した。

「もう、戻れないんだよ」

「いいんだ。ぼくは怖くない」

男は、青薔薇に指を這わせる。

「明日、雪は積もっているかな？」

青年ははぐらかすような言葉を男へと、発する。

「雪が積もったら、どうしたい？」

「雪が積もったら？」

青年は、その先の言葉を見つけられずにいた。

2人は黙ったまま、夜の静寂に身を横たえて互いの存在だけを感じていた。

男は再度、青薔薇に指を這わせた。

二度目は、一度目より強く。

青年はその指にこめた力の強さだけで、男の心が自分だけに向いていることを読み取った。

青年は、男と暮らすうちに笑わなくなっていた。

静かな時に不必要だと、感じるものを自ら捨てていった。

男は、青年がいつの間にか笑わなくなったことを淋しく思った。

「どうして、笑わない」

「静かな生活に笑顔なんて、不必要だよ」

「本当に不必要かい」

「静かなら、それでいい」

「おまえが笑わなくなって、淋しくなった」

そう言うと、男は青年の背中の刺青に指を這わせた。

青年は「うっ」と、短い吐息をもらして男の指の力強さを測った。

次の朝、青年は鏡に向かい笑顔を思い出していた。

FIN.

窓を開けると雪が降っている。

今日も外は、一面の白。

もうすぐ、姉の七回忌なのを嫌でも思い出す。

ぼくは姉が死んでから、物思いに耽ることが多くなった。

雪の音がすると、姉が雪を踏みしめて帰って来るような気がするからだ。

姉は、冬に生まれた。

だから、名前は六花(ゆき)。

その所為か、冬のスポーツが得意で、スケートでも名前のおりに花を咲かせた。

「スケート、滑っているとね。シュッ、シュッって氷の音がして、雪が降っているとサラサラって、音がするの。冬は春、夏、秋より自然の音が少ないけど、小さく静かに音がするの」と、姉が言っていたのを思い出す。

(冬の微かな音も、聞き逃さない優しさをぼくに教えてくれた姉さん。ありがとう。ぼくは姉さんを忘れないよ)

姉は自分の誕生日を祝ってくれるという、友だちの家へ行った帰りに車道でスリップした車が歩道に乗り上げ、その車にはねられて命を落とした。享年二十歳だった。

fin.

母がわたしをこの森にすてた日から、わたしはここで育った。

食べる物の採り方と、森での暮らし方は森の主である妖精の小父さんとその奥さんに習った。

食べる物といえば、この森に根を下ろすぶた芋と茸と、春、夏、秋に採れる山菜。

勿論、飲み物は自分の手で作った。

秋になれば、山葡萄の実で美味しいジュースを。

ジュースに飽きて、冬が来ればジュースをそのまま発酵させて、葡萄酒を作り寒い冬に暖をとるための飲み物にした。

春が来れば、自然に雪は溶けて雪解水の美味しさに舌が震えるほど。

森で生きることは、時々感じる少々の淋しさや悲しさ、人間が森へ分け入ったことの罪以外、全て素晴らしいことばかりだった。

いつしか、わたしはこの森に迷い込んだ人々の道案内をすることをおぼえて生きるようになった。

母には無用だったわたしも、この森にはなくてはならない生き物となっ

ていた。

fin .

夏樹は食堂の片隅から、弟を散歩に誘う。

邸の庭はいつものように様々な花を咲かせてふたりを待っていたが、今日は誰も入らずに密かに息づく花野に連れて行く決めていた。

「亜樹、食事が済んだら散歩に行かないか」

夏樹は、箸の手を休めて夏樹の顔を覗き込んでいる弟に再度尋ねた。

「どうする」

食卓の上に飾られた、花の青が淋しく光りふたりの間に静かな時間を作りだす。

その僅かな隙をぬって、弟は応える。

「行きます」

「今日は、すぐそこの花野まで行こう」

亜樹が、食事を終わるとふたりは出掛ける用意をした。

白い開襟シャツに白いズボン。経木帽を被り、並んで家を出た。

強い陽射しにやられまいと、弟は夏樹にしっかりと寄り添い離れない。

余所見もせず真っ直ぐ歩いた。

夏樹は弟のあまりの臆病さに、何を話せばいいのか判らなかった。

無口になって歩いて行くと、風景が移り変わったことに気づく。

今まで有った家並が、そこからは様々な木々や草花が並ぶ花野になった。

夏樹は急に弟を目で追った。

今までしっかりと、自分に寄り添っていたのに軽い足取りでかけ出した。

「兄さん見て。綺麗」

花野の中をかける亜樹が一瞬、蝶のように見える。

「急にかけては、危ないよ」

口に出して言っはみるものの、尾花や野葡萄などの背丈の高い草木に囲まれると、

弟が何処かに消えてしまうような錯覚にとらわれて再び目で弟を追った。

「亜樹、かけてはいけない」

自分が発した声の大きさに我に返った。

「兄さん、此処に居ますよ」

すぐ傍で、声がした。

声がしたほうを見やると、1本の木の下で涼やかな笑顔で手招く弟がいる。

「兄さん、父様がお作りになった植物標本に此れと同じ木の葉が有りましたね」

夏樹はそう言われて、木を見上げた。

父親が花野を訪れて植物採集し作った、植物標本の中にその葉は秋の色を湛えながら存在している。

「亜樹、よく判ったね」

「父様の植物標本は、身体の弱いぼくにとって心の森だった。父様はぼくに植物の図鑑でひとつ、ひとつ説明をして下さりました」

父を思う言葉を弟が発するのを聞いたのは、初めてだった。

それから、様々な植物や樹木に触れたり、それらを観察したりしながら兄弟は、今まで以上に心を寄せ合った。

「亜樹、もうそろそろ帰ろう」

兄は弟の心に灯ったあかりを消さぬように静かに声をかけた。

家に辿り着いたふたりは、父が遺した書斎で標本を見ている。

「また、ふたりで花野に行こう。ぼくたちは、父様に良い思いを遺していただいたね」

弟は、深く頷く。

其の夜、夏樹は不思議な夢を見た。

亜樹が蝶になり、ひらひらと花野を飛んでいる。

亜樹は花野の中を飛び回ると、姿を消した。

夏樹には、弟が健康になっていく予感がした。

花野に有りて、人は人を思う。花野に有りて、心は心を欲する。

FIN.



この季節、父さんは森から縦の木を伐り出して売りに行く。  
この時季の森がわたしは、好き。  
だから、父さんに頼んで連れてってもらおうの。  
勿論、仕事のお手伝いのためって言って。  
このころの森の中は、とても静かよ。  
動物たちは冬眠しているし、雪が降っているだけ。  
でも、わたしには見えるの。  
木の幹や木の枝のところに働き者の妖精が。  
縦の木を運ぶ時、ちょっと手伝ってくれたりもして。  
12月は、魔法の季節。母さんが教えてくれたとおりの素晴らしい季節。

この部屋がやけに広く感じた。  
ひとりじゃ食事も美味しくない。

わたしは、泣いた。

終わった恋愛の一部始終を思い出し。

涙がかれるまで。

そして放心状態から回復すると、しおキャラメルを一粒くちにした。

身体から抜けた塩分を補給するため。

泣いた後、塩分補給をする。

それも、思い出の一部分から剥ぎ取った行為。

一緒に暮らしていた <sup>つかさ</sup> 吏さんが、一番最初にわたしに伝えてくれたこと。

吏さんは、ひどく泣き虫だった。

仕事から帰った吏さんが、自分の部屋で泣いている嗚咽を聴いたことがあった。

その後も、幾度かそんなことがあったがわたしはそんな吏さんに声がかけれなかった。

何故なら、泣いた後の吏さんは驚くほど静かな笑顔をわたしに向けるからだった。

そして、部屋から出てくると決まって、わたしの手にしおキャラメルを二粒のせてくれた。

そのことがいつの間にかわたしの心に留まっていて、わたしも泣いた後にしおキャラメルをくちにす  
るようになった。

多分、この先ずっと、泣いた後にはしおキャラメルをくちにするのだろう。

FIN.

